



令和2年度文部科学省
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業

「共に学ぶコミュニティ形成実践研究事業」 報告書



共立する社会へ



新居浜市生涯学習センター長
中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員

関 福生

「人は自分が関わったことのある人に対しては思いを致すことができるが、日頃つながりのない見ず知らずの人に対しては、その人が何を考え望んでいるか想像力を働かせることは困難である。」と語った人がいます。これまでの生涯学習事業は「集うこと」を前提に成立し、その結果として時間、場所、経費負担など提示された条件を満たした受講生にのみ提供されるものだったのではないのでしょうか。「障害をもつ人達は、これまで学びたいにも関わらず、学ぶことができなかつた状況だったのではないか」という問題意識が、この実証研究に関わった原点でした。

私たちが事業を企画立案する際に、果たして障害をもった人を想定していたかどうか考えてみて下さい。ともすれば、自分の貧弱な想像力に任せ、勝手な思い込みで、おそらく参加することはないであろうと予断することはなかったのでしょうか。現在は障害者権利条約も批准され、障害者への教育機会の提供やそれに伴う合理的配慮が求められているにもかかわらず、いまだその環境は不十分と言わざるを得ません。本来はそれぞれが思いを提示し、時には衝突しながらも、お互いを承認するステップを積み重ねていくことが、新たな行動へ導く近道だと思えるのですが、なかなかそこには辿り着かない現実があります。

「事業の目的として、有効な定義はただ一つ『顧客を創造すること』」と喝破したのはP.F.ドラッカーですが、改めてこの言葉の意味をじっくりと噛みしめたいと思います。自分の思い込みで、必要だと考えた事業を展開してきたのがこれまでの活動だったのではないのでしょうか。学習者の欲求を過大評価し、事

業を実施しても人が来ないこともあれば、過小評価して着手せず、後の祭りになってしまうこともあった気がします。ドラッカーは顧客を創造する上で大事な機能として、マーケティングとイノベーションを掲げています。現代社会では営利活動のみならず、非営利活動、とりわけ生涯学習のように人間が基盤にある場合は、多様な学習ニーズや活動意思をどう捉えるか、マーケティングが生命線になります。また、従来のやり方を見直し、そこに新しいアプローチを組み込み、変化を起こすイノベーションが求められ、両者は不離一体のものであると考えます。

今回の実証研究は、1.現状を正しく知ること 2.新しいコトへの挑戦 3.学習歴の構築が大きなテーマでした。

■ 1. 現状を正しく知ることでは…

今回県内の様々な団体・機関のご協力をいただき、アンケート調査によって障害をもつ方々の生の声に耳を傾けることができました。そこに現れた数字には重い事実が込められています。それと同時に、その数字の見えない事実があることも教えられた気がしています。現実存在する様々な障壁が、消極的な回答を導き出していることがあり、障壁を取り除いていく努力が求められていることを教えられました。その壁を融かしていくためには、対話の場が必要であり、数字では見えない本質を見極め、優先順位を決めることが大切であることを学びました。

■ 2. 新しいコト（プログラム）への挑戦では…

今年度は新型コロナウイルスによって、集まることが制限されました。その結果、一気にリモートによる取組が拡大しました。リモートによって超えられた障壁とリアルでなければ味わうことができない領域があることを教えられ、両者の良いとこどりを探り、新しい学びのスタイルを探ることが、障害をもつ

た人にとって有効な学習手段の開拓につながることを学びました。

芸術や文化という感性を大事にする領域は、本来は障害をもった人との親和性が高かったはずにも関わらず、これまで機会が閉ざされていたことを知りました。

東予では、これまで敷居が高かった美術館との連携の下、視覚障害や知的障害、発達障害をもつ方に対して、作品に直接触れることのできる芸術作品との接点をつくることで、従来の固定観念を打破することができました。また、会場に誘導マットを実験的に使用したことで、施設側にも気づきが生まれ、次年度以降の継続につながるという副産物も生まれました。

中予では、愛媛県で盛んな俳句をテーマにした取り組みが行われ、五七五の文字の中で遊ぶ楽しみを仲間感覚の中で実感でき、共に活動する仲間づくりに結び付きました。これまでは、支援する側—される側という関係性が邪魔をしていましたが、同じ土俵の上で自らの思いを出し合える素晴らしさを味わうことができました。

南予では、地域特有の食文化を語り合う楽しみができました。「食べる」という共通体験を通じて初対面の人の距離が一気に縮まることを実感し、生活に根差した学びは、共生のプログラムとして身近で最適なテーマだと感じました。

■ 3. 学習歴の構築・デザイン化では…

当事業において学びのポートフォリオとして、「生涯学習パスポート」のモデルを作成することを企図していましたが、結果として成果物を作成するには至りませんでした。自分が学んだことを蓄積していく作業は、目標達成に向けて大きな意義を持つものですが、学習提供機関の協力や本人の努力が求められるものです。煩雑な対応を多くの方に求めることは困難であり、簡易で、興味をそそる ICT の活用や学習成果が個人の成長と結びつく仕組みが必要と考えます。

当事業の実施を通じて実証されたこれからの方向性をまとめました。

□1. 新しい事業に取り組むことが、新しいつながりを生み出す。

従来から行ってきた事業の場合、そこに関わる者は固定されがちですが、今回のように新しい企画への挑戦が行われることで、これまで想定していなかった新しい人材や機関、団体が協働できる可能性が広がることを実感できました。小さなコミュニティにおけるつながりが多く生まれ、それらが緩やかにネットワーク化されれば、多面的、重層的な学びの場が提供され、学びのコミュニティの実現に結びつくものと考えます。

□2. 日常的につながっていることが実感できる接点を沢山つくる。

障害を持った人や外国人と日常的に接点をもつ人は未だ少数派です。接点がないゆえに、過剰な配慮や、微妙な距離感をつくってしまうものです。日常的につながる場をつくり、相手のことを理解することができれば自然な関係性が生まれ、学びの場に巻き込むことも可能になるのではないのでしょうか。今回の事業では、料理、文化、芸術などをテーマに共に学ぶ場を提供しましたが、これらをきっかけにして相手を理解し、新しいプログラムを開発していく可能性を感じています。

□3. 「集まる」ことに固執せず、個々に応じた多様な学びの手法を活用する。

従来の生涯学習・社会教育は、人が集うことを前提条件としていましたが、今回の新型コロナウイルス禍によって、集うことを避けて行う学びが一気に加速されました。当事業においてもリモートによる事業が多くありましたが、概ね好感をもって受け入れられていました。その一方で、リアルな対面のつながりを希望する声もあり、対面とリモートを併用するハイブリット型の新しい学びのスタイルを構築していくことが望まれています。それにより時間や場所の制約が解消され、障害をこえて参加できる機会が膨らむことが期待できます。今後は、デジタルデバイドを解消していくことが求められ、ICT 環境の整備や

スキル習得のための研修実施などの支援が求められます。

□4. 社会全体で障害をつくらないように支え合う緩やかなつながりをつくる。

今回の事業において障害者団体、行政機関、教育機関の新しいつながりが生まれ、その必要性が再認識されました。従来は、障害を持った人は「福祉」という固定観念が強くありましたが、「教育」や「経済」など様々な領域の関係者が緩やかにつながり、支え合うことが重要であると考えます。県内では、愛媛大学が先進的に当実証事業を展開しており、今後、コンソーシアムの構築を計画しているとのことですので、お互いの強みを生かしながら、共に学ぶコミュニティ形成に向けて取り組んでいきたいと考えます。

★結びに

国連が提唱している 2030 年までに達成すべき持続可能な開発目標（SDG's）の理念として謳われている「誰も取り残さない」社会を実現していく上で、共に学ぶコミュニティの実現は大きな意味をもつものと考えます。人生百年時代といわれる中、誰もがハンディをもって生きていく時が訪れるに違いありません。他人事ではなく、自分事として、すべての人の幸福が実現できる社会を共に築いていきたいものです。一人ひとりに個性があり、多様性があることが素晴らしいと思え、お互いの自由を認め、支え合い、共立していけるそんな社会を目指したいものです。

(2021 年 3 月)





目次



巻頭言 共立する社会へ 関福生

第1章 プレ・アクションとキック・オフ・シンポジウム

1. プレ・アクションで奮い立つ . . . 1
2. キック・オフ・シンポジウムは「消えてなくなるために」 . . . 3

第2章 「学びと共生社会」アンケート

1. 調査票を「つくる」 . . . 6
2. 調査票を「配る」 . . . 7
3. 「答え」に答えていく . . . 9

第3章 学習プログラムの開発

1. 「ふれて感じとる彫刻たち」(東予エリア・芸術) . . . 14
2. 「インクルーシブ・セブンティーン」(中予エリア・俳句) . . . 23
3. 「手前味噌クラブ」(南予エリア・食) . . . 28
4. プログラムのこれから . . . 31

第4章 「連携協議会」の機能

1. 熟議から始まる「協働」 . . . 33
2. 「違い」が生み出す「豊かさ」 . . . 38

おわりに . . . 43

巻末資料

「学びと共生社会に関するアンケート調査」 調査票

生涯学習夢まつり 展示ポスター

共に学び、生きる共生社会コンファレンス

愛媛大学「〇（まる）のつどい」第3分科会 写真



第1章

プレ・アクションとキック・オフ・シンポジウム

～新しい「つながり方」への挑戦～



1. プレ・アクションで奮い立つ

この事業への挑戦を決めた頃、まさか「令和2年度」がコロナ禍一色になるとは夢にも思っていませんでした。わたしたちの企画書には、先進地に行って学び、愛媛に講師を招いて指導を仰ぐ姿、障害をこえて出会い、ふれあう場面が楽しみに描かれていました。その事業の船出が「非常事態宣言」の真ただ中・・・地域を越えた往来も、集うことも避けるべきこととなった世界で、事業の見通しも立たず、わたしたちの中には重苦しい空気が漂っていました。

そんな中、「地域教育実践ネットワークの仲間が、コロナ禍により中止になった今年の松山まつり・野球拳おどりを、オンラインで開催しようとしている」とのニュースが飛び込んできました。愛媛の一大イベントである「松山祭り」の「野球拳おどり・野球サンバ」は、「連」と呼ばれるグループが、趣向を凝らした衣装と振付で市街を華やかに練り歩きます。出場を目指して練習を重ねてきた人たち、観覧を楽しみにしてきた人たちのために企画された「松山・野球拳オンラインまつり」。その気概を耳にして、本事業のコーディネーターやボランティアたちも奮い立ち、オンラインまつり実行委員会が募集している「野球拳おどりのダンス動画」に挑戦することにしました。

ところが、声をかけていくと、行く先々で「ダンスなんて、無理～！」と尻込みされます。「特別支援学校時代にうまく踊れなくて苦手意識がある」という人、「振り付けを覚える自信がない」という人、「車椅子では・・・」という人、…。でも、「ICTを活用したら、みんなの表情や小さな動きの変化をつないで行って、編集次第でそれらしくなるから大丈夫！」「こんな時だからこそ楽しい思い出

作ろう！」と伝えると、興味がわいてきたらしく、ヘルパーさんたちと音楽に合わせて身体を動かしたり、野球の動きをしてみたり、盲導犬と軽やかにステップを踏んでみたりする動画があつという間に集まりました。中には、「感染症対策でグループホームにいる息子と会うことができないけど、写真だけでも参加させたい」というご家族さんから寄せられた一枚もありました。

YouTubeは「観る」専門・ICTとは縁遠いコーディネーターやボランティアたちが、動画撮影のポイントや編集技術を懸命に学んで制作した4分10秒の動画は締め切り日に完成しました。県内外のプロのダンサー、大学のダンス部、かわいい幼児や小学生など、多様な顔ぶれによるダンス動画の中に自分たちの動画が並んでいるのを目にして、参加者からは「挑戦して良かった」「自粛生活の中で良い思い出ができた」「みんな笑顔なのが良かった」「いつか本当の松山まつりにも出てみたい」との声が聞かれました。

ICTを活用することで、「会えなくてもつながることができる」ということに気づくことができ、また、「無理・難しいと思うことでも、仲間になって楽しんでみよう」というメッセージとなりました。事業の企画書でも述べた「共に学ぶことを楽しむ」という気持ちを取り戻すことができた挑戦でした。

*現在 390 回再生！

QRコードからアクセス
してご覧ください。



2. キック・オフ・シンポジウムは「消えてなくなるために」

プレ・アクションにより YouTube での動画配信が情報の拡散にも有効であることが分かり、予定していたキック・オフ・イベントも動画配信で行うことにしました。

地域教育活動にも熱心な地元のフリーレポーター・やのひろみさんの進行で、車椅子ユーザーの「自立生活センター星空」代表の井谷重人さん、盲導犬ユーザーの松山市社会福祉協議会職員・森畑裕子さん、20年前から共生学習に取り組んできた元小学校教員・現愛媛大学特定教授の遠藤敏朗先生の3氏が、これまでの実践や想いを語り合いました。

撮影前の打ち合わせ風景。

この時はまだ一同リラックスしていましたが・・・。



井谷さんの交通事故のお話やその後の社会復帰までの道のり、森畑さんの視力の変化と松山での生活、遠藤先生の教員時代の挑戦や現在の問題意識などが体験談を交えながらユーモアたっぷりに語られました。そして、令和元年度に3氏が取り組んだ新しい「福祉体験学習」プログラムづくりをふりかえる中で、「仲間になる」というキーワードが浮かび上がりました。はじめに「障害」「困りごと」「支援技術」から入るのではなく、出会い、興味を持つところから「その人と一緒に楽しむためにはどうしたら良いか」を考え始め、対話しながら関

係性を深めていった小学生たちの体験学習事例が紹介され、わたしたち大人もまた、「障害者」を「支援の対象」と見るのではなく、対等な「仲間」として出会うことの必要性がうたえられました。「共に学ぶ」ことを妨げるものの解消を一緒に考え、より学びを楽しむことができるように対話しながら学習プログラムをつくりあげていく事業像が明確に示された時間だったと思います。

障害はその人の中にあるのではなく、様々な障壁を作っている環境、社会、わたしたちがその人に「障害」を作り「障害者」にしているのだという事実。

「障害の社会モデル」を確認し、新しく柔軟な発想で「障害を作らない」挑戦を始める気運が高まりました。

本事業への期待などが語られた後、3氏は「いつかわざわざ『共生』なんて言わなくても良い日が来て欲しいと願っている」と口を揃えました。障害の有無をこえて共に過ごすことがあたりまえになっている社会—その時にはわたしたちの活動は消えてなくなっているはずです。「消えてなくなる」その日まで、共に頑張っていくことを誓い、熱い語らいの時間は幕を閉じました。

後日、会話の内容が分かるよう字幕を入れた動画にして、YouTube にアップロードしました。



80分という長い動画にも関わらず、当法人の本事業専用チャンネルでは約400回再生、やのひろみさんのチャンネルからは約600回の再生があり、合計再生回数は1000回にのぼっています。

最後に、収録をふりかえった井谷さんのコメントを紹介します。

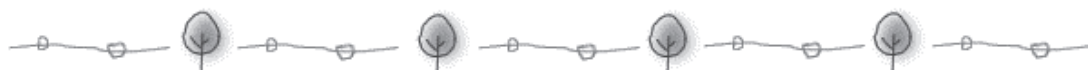
僕は長年、大人に対して「社会モデル」(障害は個人にあるのではなく、社会の考え方や環境にある)を伝え、必要な配慮があれば「共生社会」は実現できると訴えてきました。しかし、それが当たり前になる手応えはなかなか感じられませんでした。理由は、ほとんどの人が障害者と一緒に過ごした経験がないから。学校に入学する際には「障害があるかないか」という括りで分けられるため、お互いに境目が出来てしまっているのです。

そこから10年「この境目をなくしたい!」と言う思いから、先入観の少ない年齢で障害者のことを知ってもらおうと、小中学校で福祉体験学習を行ってきました。

そこで教えられたことが、大事なのは「共に過ごす」こと。素の子供達が、ありのままの僕たちを受け入れるのはそんなに難しいことはありません。大人の価値観を変えるより、何倍も可能性を感じました。

障害者だけじゃない、多様な人々が存在するのが社会です。僕が目指すのは、「多様な人と一緒にいるために何が必要か」を考えられる人を育て増やしていくこと。あと10年もすれば、僕たちの街はそんな人であふれている…はず。そしていつか僕は障害があるただの人になっていることでしょう。

すでに子どもたちの中では「共生社会づくり」が始まっています。大人が早く追い付かなければ!と気づかされる実践家たちのお話でした。



第2章

「学びと共生社会」アンケート



1. 調査票を「つくる」

第一回の連携協議会で、委員がしきりに口にしていたのが「知らない」という現状でした。後の章で触れますが、本事業の連携協議会は障害者に関わる行政部局や障がい者福祉事業者、家族会、生涯学習・社会教育関係者などによって構成されていましたが、それぞれ「自分たちが担当している業務や関わった方のことなら分かるが・・・」「そもそも学ぶことや交わることをどう感じているのかすら分かっていない」という問題意識があり、まずは「声を聴くところから始めよう」ということになりました。

事務局が「属性（年齢や住所、障害内容）」「就労や生活の状況」「情報収集方法と ICT 利用状況」「学習参加状況」「希望する学習内容や方法」「共生社会への期待」などを尋ねる質問票を作成し、連携協議会に原案提示しました。

連携協議会委員からは、「自分で回答する達成感を大切に、分かりやすい言葉を使い、ふりがなを付けるように」「誰の状況について、誰が回答を記入しているのかが分かるようにする必要があるのでは？」「就労状況を問う際には、就労偏重にならないよう選択肢の並べ方にも配慮を」「学習への参加が是であるような価値観の押し付けにならないように」などの声が寄せられました。完成版は、社会教育研究者でもあり社会福祉士の資格も有する松山東雲女子大学・短期大学前学長・塩崎委員の指導・助言によって、細やかな配慮に満ちたものになりました。

調査票の内容が完成するのを待ち、視覚障害者の PC やスマホでの読み上げに対応するためのメール版や WEB 上で回答ができる Google Form 版なども作成しました。調査で使った「調査票」は、巻末に掲載しています。

2. 調査票を「配る」

これまで、行政が実施する調査以外で、県内全域、そしてすべての障害種・程度を網羅しようというアンケートは少なかったのではないのでしょうか。本事業では、この「アンケート調査を依頼する」取り組みそのものが、これまでわたしたちがつながっていなかった人たち、すなわち障害者やそのご家族、支援者たちと関係を築いていく第一歩と考えました。

その趣旨をふまえ、連携協議会委員がそれぞれの立場やネットワークを駆使して各方面に協力を要請していきました。特別支援教育や障害者福祉分野では名前も知られていないはずの当法人が実施する調査ですから、事業や調査の趣旨を理解してもらうところから始める必要があります。

県の障がい福祉課からは、事業所に協力依頼が呼びかけられました。えひめ障がい者就業・生活支援センター所長の鹿島委員は、県内すべての就業・生活支援センターの代表者に電話をかけ協力を依頼しました。各センターが持つ相談支援専門員の広いネットワーク、相談支援専門員と担当利用者（障害者）との信頼関係の強さは本調査を実現させた大きな要因でした。県内の障がい者支援NPOのパイオニアでもあり当事者・支援者問わず広いネットワークを持つNPO法人ふうしすてむの川崎委員は、調査協力とWEB版調査票を関係者宛てのメーリングリストで一斉に流しました。愛南町役場に勤務する岩井委員は、庁内の担当課に声をかけ、担当のみなさんから協力を約束する心強い言葉を頂戴しました。

コロナ禍により外部との行き来を断っている入所施設も多く、施設入所者への依頼が困難かと思われていた中、鹿島委員の働きかけにより愛媛県社会福祉事業団が全面的に協力してくださることになりました。事業団が運営する入所施設での調査を行うことができ、施設で暮らす方々からの声も聴くことができました。研修会会場で話を聴いて「うちの事業所でも協力したい」と申し出て

くださる事業所もあられました。

文字数もページ数も多い今回の調査は、身近で信頼関係がある人たちからすめられたり説明されたりすることがなければ、そのまま見向きもされなかったかもしれません。後日聞いたところでは、ある相談支援専門員は、担当する利用者（障害者）一人一人に調査票を手渡し、必要があれば説明を加えたり、回答記入の支援を行ったりしてくれたそうです。ある施設では、入所者の方につきっきりで調査票の質問文や回答選択肢を何度も読み上げ、記入を見守ったり、返事を書きとめてくださったりしていたそうです。また、障害者自身からも「自分も回答してみたい」という声があがり、事業所でコピーしてもらったり、仲間とWEB版で回答したりした方もいたと聞きました。

2か月がかりの配布と回収が済んで二週間以上が経過した頃、愛媛県の最も南にある愛南町役場から一通の封筒が届きました。中には「14歳の子が自分でアンケートを読みながら回答したものです」と添え書きがありました。

わたしたちが「声を聴きたい」と強く願ったのと同じように、障害者や周囲の方もまた「声を届けたい」と強く感じているのかもしれません。

2006年に国連で採択された「障害者権利条約」は、「わたしたちのことをわたしたち抜きで決めないで（Nothing About us without us）」を合言葉に作成されました。共生社会を共につくる者同士が、思いを伝え合う場を作り、そこで生まれた言葉をいかす仕組みづくりが必要です。



(町HPより)

3. 「答え」に答えていく

調査には 430 人の方が回答を寄せてくれました。

住所地は 17 の市町（全 20 市町）にまたがり、地域別でまとめると東予地域：27%、中予地域：52.1%、南予地域：19.5%となっており、愛媛県内ほぼ全域のみなさんにご協力をいただいたということになります。また、年齢も、10代から 70 代以上の幅広い年齢となっていました。

すべての質問項目についての回答結果を紹介した報告書は別途発行しておりますので、ここでは、連携協議会が注目したいいくつかの調査結果に紹介していきたいと思います。

なお、障害種別についても、下表のように幅広い障害を網羅しています。

また、障害者本人による回答記入が約 60%、本人が誰かに読み上げや記入の補助をしてもらいながらの回答が約 24%となっています。

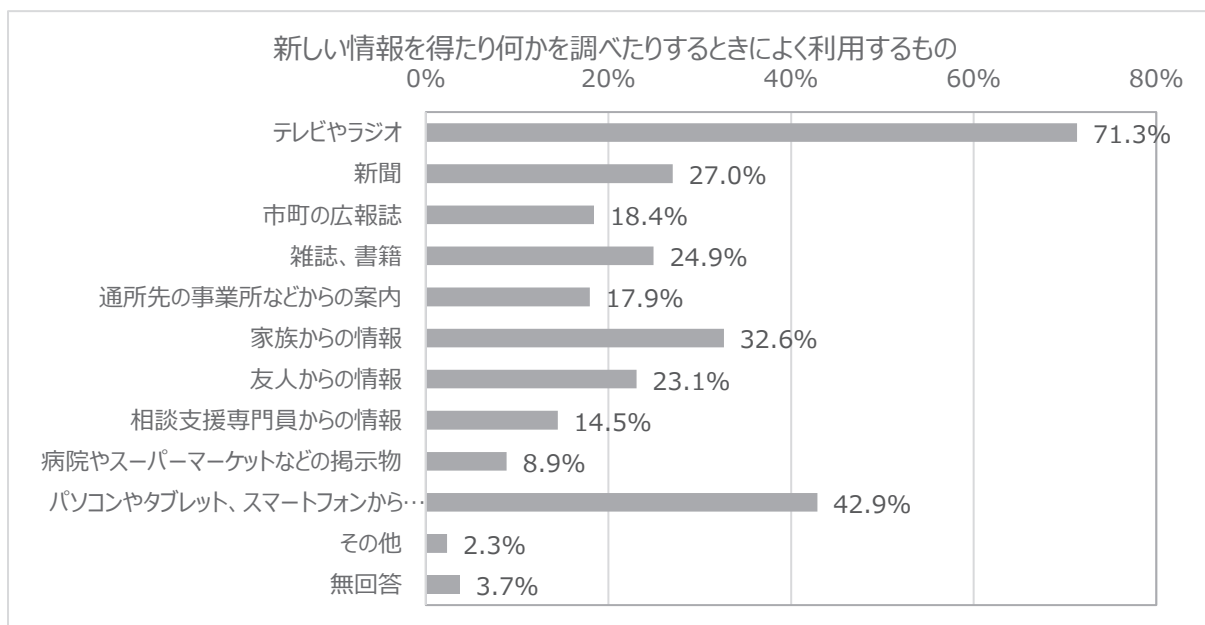
	回答数	%
1 身体障害(視覚)	20	4.7%
2 身体障害(聴覚)	22	5.1%
3 身体障害(肢体不自由・車いすやストレッチャーを使用している)	43	10.0%
4 身体障害(肢体不自由・車いすやストレッチャーは使用していない)	34	7.9%
5 知的障害	198	46.2%
6 精神障害	71	16.6%
7 発達障害	65	15.2%
8 音声・言語・咀嚼機能障害	11	2.6%
9 内部障害	7	1.6%
10 難病	15	3.5%
11 その他	17	4.0%
無回答	22	5.1%
計	525	122.4%

◆使用しているメディア

集計結果を見た連携協議会メンバーがまず注目したのは、新しい情報を得たり何かを調べたりする方法としての ICT 機器利用率の高さです。一番よく利用するメディアとして抜群に多いのはテレビ (71.3%) ですが、「パソコンやタブレット、スマートフォンで調べる」という人が 42.9%にのぼっていました。

インターネットを利用している人が多く、今後の情報発信方法に反映していく必要性が示されました。

なお、今回の回答のうち、29人がGoogle Formとメールを使用していました。情報発信、情報収集のいずれにおいても新旧メディアを併用することが望ましい時代のようにです。



◆参加している学習活動・参加したい学習活動

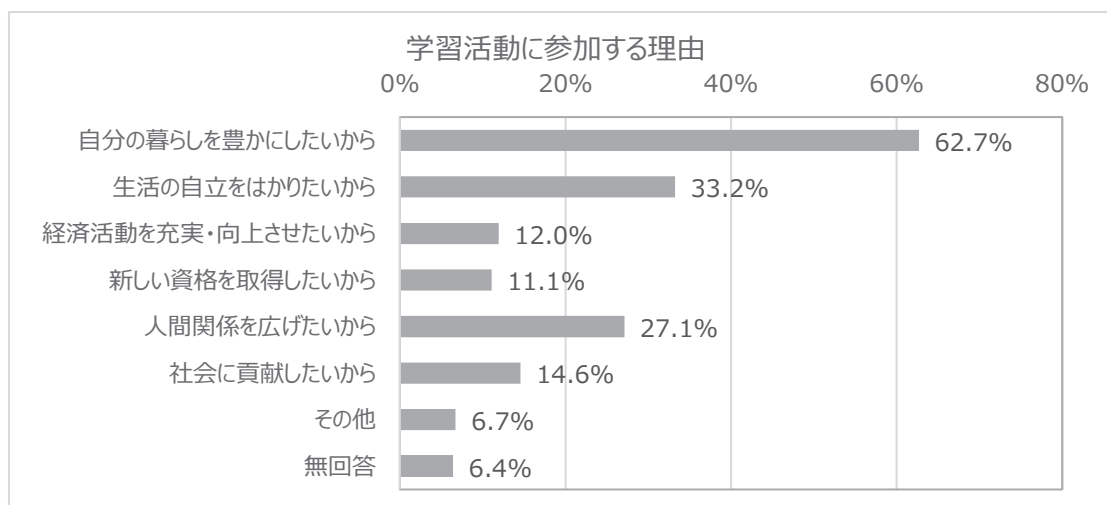
31項目の学習活動内容を挙げ、「この1年で参加したもの」と「これから参加したいもの」と尋ねました。

参加経験があったもので多いのは「スポーツ：21.2%」「レクリエーション：16.1%」「音楽：14.0%」「健康の維持・向上：12.1%」、参加を希望するものでは「スポーツ：21.4%」「健康の維持・向上：20.7%」「音楽：18.2%」となっていました。体験している内容と希望する内容とが大きくかけ離れていることはありませんが、この1年で体験した活動内容数が一人当たり平均2.5であるのに対し、希望する活動内容数は平均3.2となっており、活動内容の幅を広げたいと感じていることが分かります。

◆生活の充実への希望と阻害要因

約80%の障害者が今後の学習活動への参加を希望しており、そのうちの約

63%が「自分の暮らしを豊かにしたい」ことをその理由として挙げています。



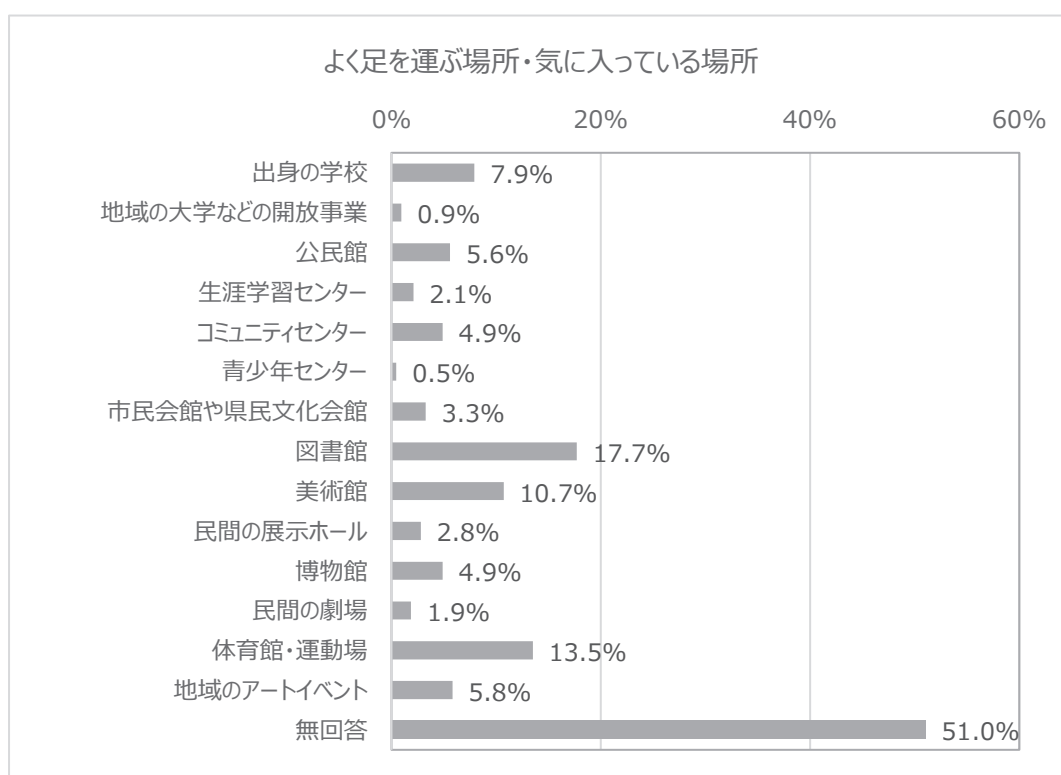
また、33.2%の人は、何かの知識や技術を得ることで、生活の自立につながることを期待しています。

一方で、約 29%が「身近にどのような学習の場があるのかが分からない」、約 22%が「新しいことを始めるのが苦手」と答えており、学習意欲を持ちながらもその機会を得られずにいることが分かります。そのような学習希望者を参加につなげていくための環境整備や働きかけが急務です。

	回答数	%
身近にどのような学習の場があるのかが分からない	125	29.1%
自分が楽しく安心して学ぶことができる場が少ない	87	20.3%
仕事や日常生活で困っておらず、学習する必要がない	44	10.3%
忙しくて学習する時間がない	32	7.5%
学習の場に参加する(外出する)のが大変	62	14.5%
学習することについて相談できる人がいない	34	7.9%
新しいことを始めるのが苦手	97	22.6%
知っている人がいないと新しい場に入りにくい	86	20.0%
新しい人間関係を築くことに負担を感じる	81	18.9%
その他	21	4.9%
無回答	106	24.7%
計	775	180.7%

◆立ち寄り先の少なさ

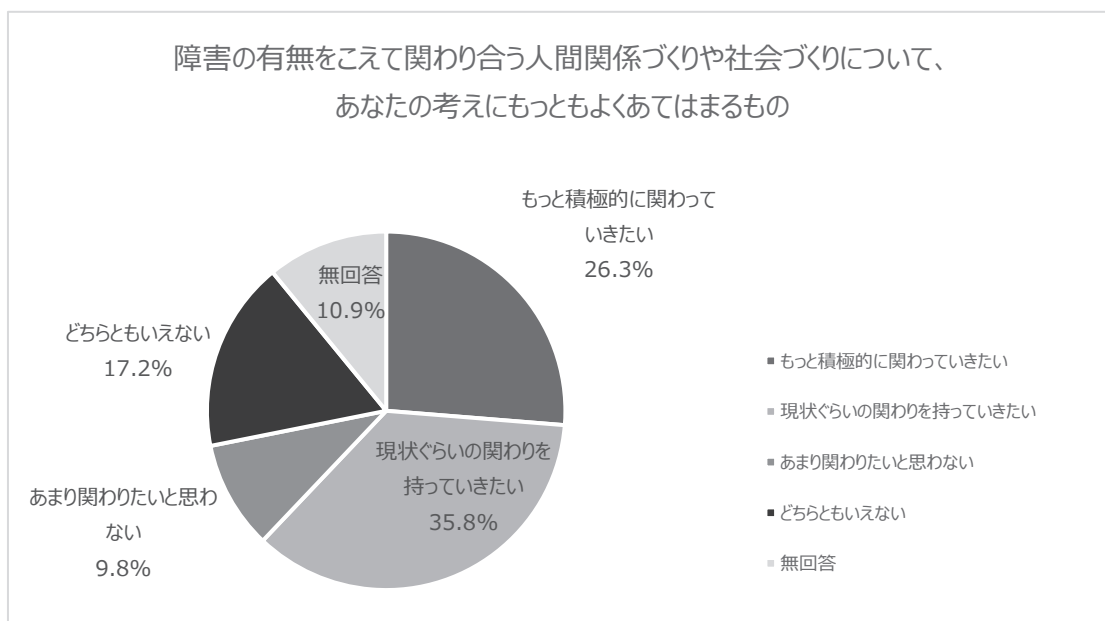
社会教育施設や文化施設をどの程度身近に感じているのかを尋ねたところ、よく足を運ぶ場所・気に入っている場所として比較的多かったのが「図書館：17.7%」「体育館：13.5%」「美術館：10.7%」でした。ほかのいずれもあまり利用していないことが明らかになり、連携協議会委員からは「障害者がもっと気軽に足を運ぶことができるような立ち寄り先が地域に増えて欲しい」との感想が聞かれました。



◆共生社会への願い

共生社会づくりへの思いを尋ねるため「障害の有無をこえて関わり合う人間関係づくりや社会づくりについて、あなたの考えにもっともよくあてはまるものは？」という質問を作りました。回答では、「現状ぐらいの関わりを持っていきたい」が最も多く（35.8%）、次いで「もっと積極的に関わっていきたい」が26.3%、「どちらともいえない」が17.2%。「あまり関わりたいと思わない」が9.8%となっていました。

4分の1にあたる「もっと積極的に関わっていききたい」という人たちが、方法を見出し、その願いを叶える場面を作っていくことが必要です。また、現在の安定した人間関係や生活を維持したいという思いにも寄り添い、それぞれのニーズに合わせた学習機会を提供していくことも忘れないようにしなければなりません。



調査票の最後の質問は、「集計結果の報告や講座案内を希望する方は、連絡先をご記入ください。」でした。記入してくださった方は、30名。「質問して終わり」ではないアンケート調査にするために、ここからのつながりを始めたいと思います。

★アンケート調査の結果の詳細をご希望の方は裏表紙（裏面）に記載してあります住所かメールアドレスにご連絡ください。



第3章

学習プログラムの開発



連携協議会では、第1回の会議において学習プログラムの開発に関する以下のような方向性を掲げました。

- ◆障害の有無をこえたワーキンググループを結成し、そこで「何に挑戦したいか」「何を学びたいか」「どうやって実現するか」を熟議する。
- ◆グループのメンバーは「支援する」—「支援される」関係ではなく、関わる全ての者が対等な学習主体となりプロセス自体を「学習活動」とする。
- ◆法人が持つ地域教育のネットワークを生かしつつ、持続可能性を考えて既存の福祉・教育分野の社会資源を積極的に活用する。
- ◆柔軟かつ新しい発想で挑戦していき、文部科学省担当者が驚くような実践を行う。

コロナ禍の中、試行錯誤しながら愛媛県内の東予地域、中予地域、南予地域で取り組んだ学習プログラム開発について紹介します。

1. 「ふれて感じとる彫刻たち」(東予エリア・芸術)

◆学習活動内容

東予エリアでは長年にわたって障害児がふれて楽しむことができるおもちゃ作りに取り組むボランティア団体「おもちゃ図書館きしゃぼっぽ」、障害児・者の絵画表現活動の支援に取り組む「島の風工房」などが活発に活動を展開していることから、芸術分野での学習プログラム開発に取り組むことにしました。

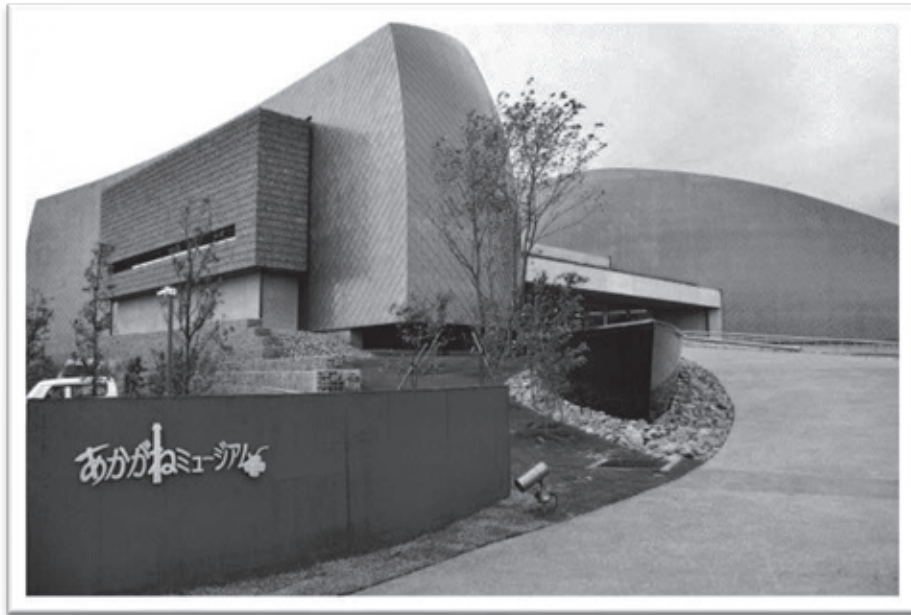
当初、美術講座を計画していましたが、密を避けた指導・学習が難しく、講

座内容を検討していたところ、視覚障害があるワーキンググループメンバーから「視力の低下が進むにつれ、好きだった美術館に足を運ばなくなった」との発言がありました。連携協議会を通してヒアリングを行ったところ、知的障害者のご家族から「子どもの頃、不意の動きや発声が心配で美術館に連れて行けなかった」、特別支援学校教員から「引率しても生徒の動きを制してばかりになる」、発達障害の青年から「展示物を観ていく順番が混乱して苦手」、電動車いすユーザーから「人や展示物にぶつからないか気になることがある」などの声が聞かれました。美術館は、障害者にとって敷居の高い場所だったのです。

そこで、「多様な人たちの自由な楽しみ方を叶える美術展」「誰もが思い思いの過ごし方ができるミュージアム」の実現を目指して「インクルーシブな作品展」を企画・運営することを学習テーマとしました。ワーキンググループは視覚障害者、肢体不自由・発達障害者を含む5名で構成。2月上旬の開催を目指して10月から具体的な内容（展示する作品の種類、会場、告知方法など）を提案し合いました。

「作品にふれて楽しむ鑑賞」に対し、事業の趣旨に賛同してくれた松山東雲女子大学の増本達彦准教授が彫刻作品（大型の木彫）を提供してくれることになりました。メンバーは、作品鑑賞の体験、作品展を企画する上での手続きや注意点、効果的な展示方法、案内方法などのレクチャーを受け、作品展雄のイメージを膨らませていきました。

会場はJR新居浜駅に隣接する総合文化施設「あかがねミュージアム」としました。連携協議会の関委員をよく知る同館の企画チーム3名が本事業の担当に就き、会場設営のみならず、館内各部署（受付や管理部門）への情報共有、ミュージアムのFacebook掲載、FMラジオでの告知、地元新聞社へのプレスリリースなどに尽力してくれました。その効果もあって、県独自の特別警戒期間中・平日4日間の開催ながら、約200名の来場者が得られました。



(あかがねミュージアム HP より)

ワーキンググループのメンバーは、当日、感染症対策としてすべての来場者に記名と滞在時間を記入してもらったり、手指消毒の呼びかけなどを行ったり、会場の換気を行ったりしました。また、来場者との対話を楽しむ場面もありましたが、ふれて感じとった質感や印象は語りやすらしく、人見知りというメンバーも、初めて会う人と互いの感想を笑顔で語り合う姿が見られました。

◆成果と課題

「インクルーシブな作品展とは」を語り合う中で、視覚障害者の「見えにくさ」の個別性や「点字」の普及・使用率の実態を知り、わたしたちの中にステレオタイプの「〇〇障害者」像や「〇〇障害者支援」像があることに気づきました。例えば、白杖を持っている人は全く見えない、つまり、わたしたちがアイマスクを付けたり目をつぶったりした時のようになるという思い込み。また、視覚障害者はわたしたちが文字を読み書きするのと同じように点字を使っているという思い込み。実際には、多くの視覚障害者は、物の一部分だったりシルエットだったり明暗だったりをとらえているということをメンバーは知りませんでした。印刷物の代わりに点字で説明文を作っても、それがどこにあるのか

が分からなければ読むこともできませんし、点字よりも ICT を活用して情報を得ている人の方が多いという事実は、言われてみれば「たしかに」ということばかりでした。

やがて「イベント実施」や「美術鑑賞」における大きな「障壁」は「情報の伝達」であることに気づき、「情報をどうやって伝えるか」が一つのテーマとなりました。困難に感じる場面はどんな時か、どんな環境で快適さを感じたか、便利に活用しているメディアなどは何かを語り合いながら、互いの経験や生活実態を学び合うことができました。

作品展開催告知は通常の「紙媒体チラシ」のほか、日程や会場案内、作家の紹介等を映像と音声で行う YouTube 動画を配信しました。また、アンケートの協力依頼と同じく連携協議会からの情報発信も可能ではありましたが、県下で不要不急の外出自粛が呼びかけられている中でもあり、大がかりな告知を控え人づてで情報を拡散していきました。



4日展	2021年2月	観覧時間	あかがね ミュージアム
1日目	1 [月]	10:00~17:00	地下1階多目的ホール 東京都中央区本町2丁目1番1号 Tel:03-7-31-0006 入場無料
2日目	3 [水]	10:00~21:00	
3日目	4 [木]	10:00~21:00	
4日目	5 [金]	10:00~17:00	
5日目			

(紙媒体チラシ)



(YouTube 音声告知)

「どうやって伝えるか」については、作品提供者の増本先生にも工夫を依頼しました。通常の作品展では、作品にタイトルと説明などを添えることが多かったのですが、今回は、より多様な人たちに「伝える」方法を考えていただき、文章で表すのではなく、作品があらわす自然風景や込められた意味などを音で伝えることになりました。作品ごとに「風の音」「鼓動の音」「鳥の鳴き声」「水が滴る音」などのイメージ音を小さなMP3プレーヤーに録音して、作品の足元にしのばせました。この方法は来場者に「作者の意図が分かりやすくて良かった」「作品に共感しやすかった」と、とても好評でした。音が混じらずに作品の位置を示す役割も果たせたのは、8点の作品を3~4m間隔で配置できる広々とした会場ならではだったかもしれません。

新たなころみは、一つ一つ手間や費用・時間もかかるものでしたが、メンバーや講師からは「新しい挑戦が楽しい」という感想が聞かれました。また、動画作成・配信では「アナウンスならできる」「映像編集は得意」という関わり方を可能にし、それぞれの活躍場面が生まれることも分かりました。

事業終了後の聴き取りでは、全てのメンバーが高い達成感を示し、「これからもこのようなインクルーシブなイベントを企画してみたい」「自分も彫刻作品を作ってみたくなった」などの感想が聞かれました。自分とは異なる障害についても「知りたい」と感じ始め、「ユニバーサルデザイン」への関心も高まったようです。

期間中の来場者には、視覚障害者グループ、四肢障害の電動車いすユーザー、下肢障害者、知的障害者、発達障害者など、多様な方々の姿がありました。視覚障害者のみなさんは、慎重にそっと彫刻作品に手を伸ばし、少しずつ範囲を広げながらやがて指先や掌でしっかりと作品にふれ、感触を味わっていました。やすりがけされた滑らかな曲線、荒々しくも均一な鑿（ノミ）の跡で覆われた木肌、思わぬところから伸びたり組み合わされたりしている木彫の姿に感嘆の

声を上げながら、一つ一つじっくり楽しんでいる様子が見られました。また、美術館スタッフの技術によって暗い会場の中で作品が浮かび上がっているように見えるよう調整されたスポットライトは「今の視力でもどこに向かえばよいのか分かる」との感想をいただきました。



(ふれて感じとる鑑賞)



電動車いすユーザーの方が作品の前後左右に回り込みながら伸び伸びと動き回る姿も見られ、出口調査では、美術作品鑑賞への高い満足度とともに、ユニバーサル環境への工夫についても評価する声が聞かれました。

県の特別警戒発令により、来場を楽しみにしてくれていた福祉施設の外出や特別支援学校の校外学習ができなくなりましたが、施設職員や特別支援学校の美術教員、絵画教室指導者が来場してくださいました。作者やワーキンググループメンバーと意見交換し、「鑑賞」はもちろん「作品発表の場」の大切さが語られました。「『作品展への出品』という目標があると、日頃の制作活動の励みになる」とのお話もうかがい、次年度以降、生涯学習支援として応えていきたいと考えています。

このような「イベント企画のグループワーク」を伴う青少年教育プログラムは従来から行われていますが、障害者を対象とするものはあまり見かけません。多様な主体による「インクルーシブな〇〇を企画する」というワークショップ

型の学習活動が相互理解や啓発に有効であるという可能性が本事業によって見出されました。イベント開催には費用が必要となるので次々と開催できるものではありませんが、今後は行政や関係機関へ提案していきたいと思います。

◆波及効果

愛媛県美術館が3月に「視覚障がい者をつくる美術展」を開催する予定という情報を知り、連携協議会の紹介により同館学芸員と「順路表示」「作品説明」の工夫などに関する情報交換を行うことができました。作品の保護、安全性、人員配置等の課題が多く、どちらの美術展も手探りでした。

本事業では、メンバーからの提案で、順路や作品位置を示すための誘導マット「歩導くんガイドウェイ」(点字ブロックの役割を果たすゴムマット)を設置しました。この誘導マットは、障がい者国体の一部競技会場や愛媛県立病院の眼科前では導入されていますが、一般的には知られていません。さらに、今回のような「美術展」などでの利用は実績がないということで、錦城護謨(製造会社)担当者と打ち合わせを重ねました。あかがねミュージアムの担当者とも協議した結果、共有スペース(エレベータ乗降口)から会場入口までの順路、会場入口からメイン作品までの順路、その他の作品ごとに敷設することになりました。



(上：作品ごとに敷設)

(左：メイン作品まで誘導)

実際に敷設してみたところ、メイン作品へまっすぐ伸びる鮮やかなマットが幻想的な空間にいざなうよう道のようにも見え、会場の演出のようでもありました。同館学芸員からも「このマットも展示作品の一つ」と評価されました。清掃カートや運搬カートが頻繁に往来する共有スペースでのひっかかりやはがれについても全く問題がなく、車いすやバギーのタイヤがとられることもありませんでした。



(エレベーターから会場へ)



(会場内メイン作品へ)

このころみを県美術館へ情報提供したところ、学芸員が視察来場し、会場で作品鑑賞するとともに、誘導マットの感触や表示効果などを確かめて帰られました。その後、同館での企画展でも導入が決まり、より多くの方がこの誘導マットを目にすることになりました。

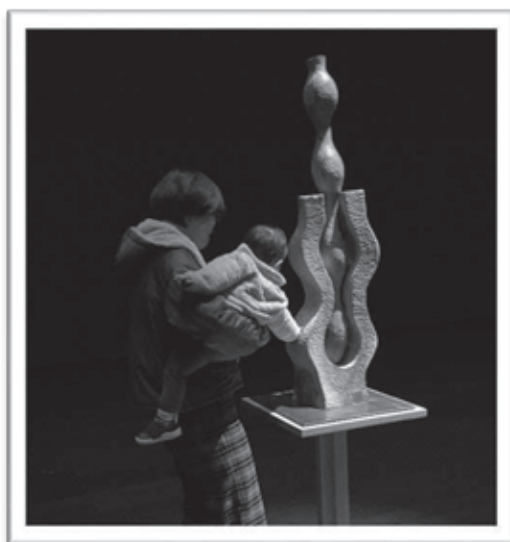
錦城護謨担当者を通して国立民族学博物館へも情報提供され、令和3年度に開催する企画展での導入に向けて参考にしていただけるとのことです。同じくあかがねミュージアム館長からも次年度開催の企画展で導入したいとのお話を頂戴しました。文化事業における今後の広がりが期待されます。

また、来場した松山市議が市議会本会議で「インクルーシブなまちづくり」「文化施設のバリアフリー化」の質疑において実践事例として紹介したとの報

告がありました。文化・芸術事業での導入にとどまらず、災害避難所備蓄品としての導入や工事中の臨時通路での使用なども検討していくそうです。障害者が安心して地域の中で生活できる環境整備の必要性に注目するきっかけとなったようです。

なお、作品展チラシは、啓発を兼ねて県内全ての公民館に送付しました。それにより数館から来場や問い合わせがあり、「自分の地域でも開催してほしい」というご要望も頂戴しました。近年、文化事業の地域格差が指摘されていますが、障害の有無だけではなく居住地によって学習機会に差が生じていることを実感しました。

そして、予想していなかった反応として、小さなお子さん連れの親御さんから「なんにでも手を伸ばす時期なので、美術館では抱きかかえておかないといけないし、子どもが喜んで声を上げると周囲に頭を下げながら会場を出ないといけない」「子どもとこんなにゆったり美術作品を楽しんで過ごせるのは貴重」との喜びの声がありました。ロコミで広がったのか、毎日数組の親子連れの出場があり、よちよち歩きの幼児が会場で楽しそうに過ごしていました。



かぎりなくインクルーシブであろうとする挑戦、マイノリティを排除しない挑戦の一つ一つが作り出す共生社会の姿を見出すことができた4日間でした。

2. 「インクルーシブ・セブンティーン」(中予エリア・文学)

◆学習活動内容

活動名の「セブンティーン」という言葉を聞いた方々からは「なんだか昭和っぽくない?」「青春?」と不思議がられますが、実は俳句の「5・7・5」=17文字に由来しています。これだけでも、このグループがあそびゴコロたっぷりユーモアに富んだメンバーで構成されていることが分かるのではないのでしょうか。

愛媛県の県庁所在地・松山市は「俳都」と呼ばれ、俳句を中心としたまちづくりに取り組んでいます。近年は、愛媛出身の著名な俳人がテレビなどでも活躍しているため、全国的にも俳句への関心が高まっているようです。その一方で、中予地区では小学校から俳句の宿題が出続けることにより、苦手意識を持っている人も多く、「市民に親しまれている文化」となっていないのが現状です。

そこで、中予エリアでは「誰もが楽しむことのできる俳句作り」のプログラムを開発することにしました。ワーキンググループは視覚障害者、重度身体障害者、知的障害者家族を含む6名で構成。これまでに福祉句会の指導経験もあるというキム・チャンヒさんに指導を依頼しました。

俳句づくりというと「文字数の決まり」や「季語」から入ることが多く、「ルールを理解していないと作れない」「季語を知らないから作れない」と敬遠してしまいがちですが、キムさんからは「写真と組み合わせる」「決められた二文字を入れる」「目に入る4文字からはじまる」といった俳句初心者にとって敷居が低くなるような多彩な作句方法が提示されました。また、「6句で作れる句集」など、具体的な目標を思い描くことができるような実物も紹介され、俳句作りへの意欲が高まりました。

俳句作りに苦手意識のあるメンバーも、自分はどんな作り方が向いているかを試したり、講師に季語の意味を尋ねたりしながら俳句を詠み、感想を述べな

がら、よりやさしく・より楽しく俳句を作る方法を提案し合いました。

句会では、「各自俳句を作る」→「講師に提出する」→「講師が作者名を隠して全員の俳句を一覧にする」→「メンバーに公開する」→「選句：好きな句に投票する」→一句ずつ「選句者と講師による評価・コメント」→「作者披露・作句意図の説明」を行います。「俳句で誰から傷つくことがないように」というモットーの講師の進行では、批評ではなく「この句のこんなところが好き」「こんな風景を詠んだのではないか」「気持ちがとてもよく分かる」など、肯定と想像力、共感に満ちた言葉が行き交いました。



(はじめての句会)

ひとつおりのコメントが出た後で講師から作者が披露されると、いつも驚きや感嘆の声が上がります。普段の会話からは見えない、意外な一面にふれるからです。作者は、その俳句に詠んだ自分の体験や目にしたもの、感じたことや幼少期の思い出などを語るのですが、それは時にユーモアを感じるものだったり、胸が熱くなるようなものだったりして、そこに居合わせた人たちが深く互いを知る時間でした。この「語り合い」の時間はとても盛り上がるもので、毎

回時間が足りなくなってしまう。

◆成果と課題

コロナ禍の影響を受け、思うように集まることができませんでしたが、講師の進行によりリモートで句会を開催することもできました。リモートによる句会では、友人を誘いやすくなるのか、開催するたびに新しい仲間が増えていきました。リモート会議に慣れていないメンバーは、松山市青少年センターで他のメンバーからサポートを受けながら俳句作りとはじめての Zoom に挑戦していました。

「インクルーシブ・セブンティーン」の仲間を増やし、また、各所にこの俳句作りのプログラムを届けることを目指し、教材開発にも取り組み、初心者向けの作句マニュアルとして仕上げることができました。また、重度の知的障害児・者が作句する場合には「文字」だけでは季語の意味をとらえにくい可能性があるという意見から、特別支援学校の教員や家族会からのアドバイスを受けながら「季語」と「風景や気持ちをあらわす絵」が描かれた「季語カード」を作成しました。これらの教材は、今後、実際に使用しながら改良を重ねていくつもりです。



(さまざまなタイプの教材を検討)

俳句プログラムについては、特別支援学校や障がい者福祉施設からの関心が高く、「コロナ禍が終息して外部からの受け入れが可能になったら、ぜひ出張講座をお願いしたい」との声を多く頂戴しています。今回開発された教材を活用したプログラムを実施して、多様な人たちと俳句のまちづくりを盛り上げていきたいと考えています。

また、句会では、俳句をとおして自分を表現する、俳句を説明することで自分を開示する、他者が作った俳句から想像をめぐらせる、説明を聴いて他者を深く理解するなどが経験できます。想像力やコミュニケーション力の向上、人間関係の拡大・深化に影響することを実感しました。この作用を損なわず句会をファシリテートできる資質や技術を持った指導者を養成することも必要です。

今年度、コロナ禍を理由としてオンライン、ハイブリッドといった方法を導入しましたが、体調や家事などの関係で外出が困難な場合にも、時間さえ合わせられたら参加ができることが好評でした。これは、講師が本事業とは別に、オンライン句会の進行ノウハウを構築していたことで成しえたことですが、俳句は特別な道具や場所を必要としないため、さまざまな状況にある人たちが身一つでどこからでも参加しやすいという強みがあります。コロナ禍の代替手段としてだけでなく、オンライン句会という学習方法を今後も大いに活用していきたいと思います。



(オンライン句会)



(ハイブリッド句会)

毎回、句会を終えるとすぐに「次回はいつ?」「次は友人を誘って参加したい」という声が上がりました。メンバーの中には、吟行会への参加やラジオ番組への投稿に挑戦している者もあり、それぞれが楽しみ方を広げています。「みんなで楽しむ」「一人で楽しむ」を自在に行き来しながら、それぞれの学びと暮らしが充実していく姿を喜び合うあたたかな学びのコミュニティが築かれています。

◆波及効果

ワーキンググループのメンバーが、自身が関わっている親子の会（知的障害者と家族で構成）に俳句作りプログラムの情報を伝えたところ、「自分たちも体験してみたい」と希望する声が多かったと報告がありました。この会では、これまで外出やレクリエーション活動をさかんに行ってきたそうですが、学校卒業後は「学び」から遠ざかっているという問題意識があったといいます。「学校卒業後だからこそ『家族の趣味』として俳句を楽しめるようになれば」「もし句集ができたら、『学びの証』『生きた証』になると思う」との期待が熱く語られ、講師費用や印刷費用を得るための民間助成金を申請する準備を進めているとのことです。

また、インクルーシブ・セブンティーンのメンバーは、松山市社会福祉協議会が市内の学校で進める「福祉体験学習」授業で積極的に講師を務めています。これまでは「講演」「ガイドヘルプ体験」「車いす体験」などを行っていたのですが、子どもたちが体験学習の感想を「俳句であらわす」時間を設けるころみを始めました。福祉体験学習に俳句を組み合わせることは、訪問先の学校の先生方からは不思議がられますが、「やさしく俳句が作れるワークシート」に興味を持ってくださっているとのことです。自分たちが学び、楽しんでいることを、「教える」ことで「学びを楽しむ仲間」を増やし、自分自身もさらに深く学ぼうとする発展的な学習活動が展開されています。

3. 「手前味噌クラブ」(南予エリア・食)

◆学習活動内容

南予エリアは自然豊かで、愛媛でも郷土文化がしっかりと受け継がれている地域です。愛媛県は裸麦の日本一の産地ということもあり、伝統的に麦の割合が多い味噌が造られています。この「麦味噌」は、九州地方と中国・四国の一部の地域で多く消費されているそうです。県外の方が愛媛のお味噌汁を飲むと甘く感じるそうですが、塩が少なく、麦麴の量が多いので甘みと香りが強く感じられるようです。味噌は地域の食文化に大きな影響を与えている存在でもあり、家庭でも外出先でも味わう機会の多いなじみのある食材であることから、この地域の「麦味噌文化」に注目して郷土の味を伝え・広める「手前味噌クラブ」を立ち上げました。

愛媛県を代表する郷土料理に、南予地方に伝わる麦味噌を使った「さつま汁」があります。宇和島市観光物産協会のホームページによると「焼き魚と麦味噌をすり合わせた汁を麦飯にぶっかけた、南予一般の家庭料理で、もともと漁師が船上で魚入りの濃厚な味噌汁を麦飯にかけ、食べていたのが始まりといわれます。見た目には素朴ですが、二度三度と食べれば忘れられない味となる奥の深い逸品です。」と説明されています。



(伊予さつま汁)

県外出身のワーキンググループメンバーもいたため、地域によって異なる食文化にふれたり語り合ったりしながら愛媛の郷土料理を味わうことを楽しみに計画を進めていましたが、コロナ禍により「食」にまつわる事業を進めることが難しい状況になりました。「一緒に食べる」「一緒に調理する」ことができないどころか、感染者が多く出ている中予地域から南予地域を訪れることすらはばかられるような時期もありました。

そのような中で、講師やワーキンググループメンバーは、麦味噌文化や郷土料理に関する資料収集、味噌の仕込み方について見学・指導を行って欲しいという醸造会社訪問など、それぞれに活動しながら情報交換を進めました。「コロナが終息したら」と励まし合いながら、それぞれが集めた情報などをどう学習プログラムとして体系化するかを協議していきました。

メンバーが一堂に会することができたのは、対面とオンラインのハイブリッドで実施した座談会（会場：吉田公民館）です。試食や調理などは行うことはできませんでしたが、講師の進行で、それぞれの家庭での「さつま汁」のレシピやこだわりを披露し合いました。同じ南予地域でも、地域や家庭によって少しずつ材料などが異なります。タイを使うかアジを使うか、千切りこんにゃくやネギ、ゴマ、刻んだ柑橘の皮などのトッピングをどうするかなど、それぞれの好みも熱く語られ、違いに驚いたり、工夫などを参考にし合ったりする姿が見られました。特別な料理ではなく、家庭料理ならではの工夫は互いに話やすく、初めて会うメンバーもいましたが、すぐに打ち解けていました。



（お腹がすいてくる座談会）

◆成果と課題

視覚障害があるメンバーにさつま汁の調理法を語ってもらう中で、調味料の判別や計量、保管など、視覚障害者の生活における工夫などを垣間見ることができました。「マヨネーズとケチャップを間違えてサラダを作っしまい、家族がびっくりしていた」と、笑い話として語ってくれる失敗談から、ユニバーサルデザインの大切さにあらためて気づきました。

また、料理好きな視覚障害のあるメンバーが、他のメンバーから「今度ぜひ料理して食べさせてください」と頼まれる姿は、この事業で掲げている「支援する―支援される関係をこえて共に学ぶ」という関係性をあらわしていたように思います。「障害者の生涯学習支援」と聞くと、わたしたちは無意識に障害者を「学ぶ側」に置こうとしてしまいがちです。このプログラムでは、障害者が「教える側」として活動する場合の生涯学習支援という視点に気づくことができました。

また、南予地域は広域であるにも関わらず交通網・交通手段が限られていて、それぞれの市町間の移動が大変困難です。そのような地域で学習の機会や人のつながりをつくるためには、ICT 活用が不可欠であることは言うまでもありません。メンバーからは、「家庭や施設をつなげるコミュニティを作り、Zoom を利用して味噌にまつわる気楽なおしゃべりの場を作れないか」という提案がありました。また、「味噌料理を紹介し合える Facebook グループなどを作ってもらえると参加しやすい」などの希望も寄せられています。愛南町在住の連携協議会・岩井委員からは「入院中でも自宅からでも視聴できる動画コンテンツの作成」を求める声もあり、メンバーで「お味噌汁の思い出」を語る動画や「味噌料理教室」、「味噌の仕込み方教室」などの動画を制作・配信する計画を進めています。

4. プログラムのこれから

事業の実施後に関係者が語った感想などをご紹介します。

東予エリアで実施した「インクルーシブな美術展の企画」では、視覚障害者、福祉施設職員、美術館職員などがワーキンググループメンバーとなり、

- ・「地元の視覚障害者団体や特別支援学校との新しいつながりができた。」
- ・「あきらめていたことを楽しむ場をつくることができて良かった。」
- ・「さまざまな障害について知ることができた。」
- ・「来場者が満足している様子が嬉しかった。」

などの声が聞かれました。

中予エリアで実施した「やさしい俳句作り」では、視覚障害者、四肢障害者、知的障害者家族、小学校教員などがメンバーとなり、

- ・「お互いの俳句について話し合っている時間が楽しかった。」
- ・「人の俳句を興味深く味わうようになった。」
- ・「生活の中で俳句の素材になりそうなものごとを探すようになった。」
- ・「季節の草花に目が向くようになった。」

などの声が聞かれました。

東予エリアのワーキンググループは、インクルーシブな社会を象徴するようなイベントを企画・運営したことによる「達成感」を強く感じ、中予エリアのワーキンググループは「人間関係の広がり・深まり」や「自身の変化」を強く感じたようです。

これからの活動に対しては、全ての地域のワーキンググループメンバーが継続参加を希望しており、友人に紹介して仲間を増やそうとしている者もいます。東予エリアで美術展を企画・運営したメンバーの中には、「作品をつくる」ことに関心を示している者もいたり、中予エリアで俳句プログラムを体験したメンバーは小学生と俳句を詠んだりしています。今年度の学習活動体験が、それぞ

れの仕事や生活に変化を生んでいると言えるでしょう。

3 地域での実践をふりかえり、持続可能性が高いと感じるのは、中予エリアの俳句プログラムです。句会は特別な道具を必要としないため、公民館でもカフェでも実施できますし、リモートでの開催も可能です。一定の経験を積み、誰もが講師となって句会の進行を務めることもでき、人数や時間に応じて規模を調整することもできます。「句会の進行ができるようになる」「句集を発行する」など、自分の目標を立てて取り組んでいくことも張り合いになるかもしれません。開発した教材を活用しながら、事業を展開していく予定です。

また、東予エリアの「多様な主体で進めるインクルーシブ・イベントの企画」は人材育成プログラムとして有効であると考えます。今回の美術展には、約200人の来場者がありましたが、約90%が「インクルーシブな工夫の良さ」を感じ、「このような美術展が増えて欲しい」と答えており、共生社会への関心やニーズも確認できました。福祉センターや就業・生活支援センターだけでなく、一般の高校や大学などにも共生学習の手法として提案していきたいと思います。

南予エリアの「食」のプログラムについては、コロナ禍の終息を待って、即調理実習！と張り切っています。ICT技術を高めながら、引き続き実践と検証を進めていきます。

本事業によって形成された共同学習コミュニティを拡充させながら、地域のニーズ、個々のニーズに応えることができる学習機会を提供していきたいと思っています。



第4章

「連携協議会」の機能



1. 熟議から始まる「協働」

連携協議会には、予定通り「障害者」「家族会」「特別支援教育関係者」「社会教育行政関係者」「障がい者福祉行政関係者」「障がい者就業・生活支援センター」「障がい者福祉サービス事業所（就労系）」「学識者」が就任しました。

【連携協議会委員・事務局（*）】

氏名	所属・役職等
井門 照雄	NPO 法人 えひめ子どもチャレンジ支援機構 代表理事
岩井 正一	全国重症心身障害児（者）を守る会会長
鹿島 俊昭	えひめ障がい者就業・生活支援センター所長
川崎 壽洋	NPO 法人ふうしすてむ, NPO 法人ぱらわく代表理事
堺 雅子	相談支援事業所「ソレイユ」, 就労継続支援 B 型事業所「彩葉」
讃岐 幸治	愛媛大学名誉教授
塩崎 千枝子	松山東雲女子大学・松山東雲短期大学前学長
関 福生	新居浜市生涯学習センター長, 新居浜市前教育長
武市 静香	愛媛県保健福祉部生きがい推進局障がい福祉課障がい支援係長
土手 康之	愛媛県スポーツ・文化部文化局まなび推進課社会教育主事
西村 久仁夫	一般社団法人コムスクえひめ代表理事
原 喜代佳	愛媛県教育委員会事務局指導部特別支援教育課指導主事
仙波 英徳	NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構 事務局長
遠藤 敏朗*	愛媛大学教職大学院特定教授, NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構
中尾 治司*	地域教育実践ネットワークえひめ
長島 道子*	NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構
柴崎 あい*	NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構

初回の協議会では、それぞれが感じている問題や希望をじっくりと語り合いました。

◆チャレンジする事業に

毎年子どもたちと無人島チャレンジに漕ぎ出すチャレンジスピリットにあふれた当法人・井門代表は、「子どもたちは障害の有無をこえてすぐになじんでいき、当たり前感覚を持てるようになるが、大人はなかなかなじめない。『いっしょにやる』ということがないからではないか。」「資料を見ていても、この事業がどういうものか分かりにくいですが、具体的な実践例の紹介を見ると、途端に分かりやすくなる。現場の力で、実践から融合のアイデアを見出して、文科も驚くような事業にしていこう。」と語り、挑戦を誓いました。

それに呼応するように、障害者当事者でもあり幅広い支援事業を手掛けるぶしすてむ・川崎委員からは「どう意味があるかは、やってみないと分からないところがある。『ぱらわく』の活動も、障害者のスポーツを応援するだけのつもりが、そこから就労につながったりした。どんな活用の仕方があるか、やっている中で見つけたのでいいと思う。」と語りました。

当法人がこの事業に取り組むきっかけを作ったキーパーソンでもある新居浜市生涯学習センター所長・関委員も「無理にうまくやろうとするのではなく、やってみてダメだった、と分かることも必要。この事業、まずはやることに意味がある。」と語り、さらに、関委員は「かつて『生涯学習』という言葉が登場した当初はなじみがなく、『障害?』と聞き返されることも多かった。その後、生涯学習を進めていく中で、ハンディキャップがある人たちへの働きかけは十分ではなかった。新しい学びのスタイルをみんな考えていけたらと思う。」と、社会教育行政をふりかえっていました。

◆障害者が主体となる活動を

愛媛県の障がい支援係長・武市委員からは「県内でいろいろな障害者関連の

事業が進められているが、特にすみわけなどは考えなくて良いと思う。」、川崎委員からは「テレワークで県外就職する人もおり、テクノロジーの発展で働き方も随分と変わってきている。時代の変化に合わせた事業展開を。」との発言があり、学習者主体の自由で柔軟な、時代に合わせた事業展開の必要性がうたえられました。

◆持続する事業に

また、愛媛県教育委員会特別支援教育課の原委員は「文化芸術支援事業で、特別支援学校が普通校の高校生とのワークショップを行った。そこでは自然な交流が生まれ、その後もつながっている。」「卒業後の学びの機会は少ない。学校教育から生涯学習につながっていくようになれば。」と、在学中だけではなく生徒の生涯を思い続ける教師としての願いを語りました。

130km の距離をいとわず愛南町から駆けつけてくれた全国重症心身障害児（者）を守る会会長・岩井委員は「子どもに重度障害があり、高等部の訪問教育などを求めて奔走し、実現した。現在も、愛大の訪問カレッジに参加している。」「家族は卒業後の問題に何年も前から備えなければならない。」「生涯学習を続けるうえで、持続性や安定性を大事にしてもらいたい。」と、家族の願いを強くうたえました。また、「言葉を発しない重度の子どもが『何も分からない』わけではないということや脳波で示すということをやったことがある。それが母親の笑顔につながった。何もできないわけではないし、学びによって生まれるその人の変化や成長を一緒に見つけようとしてほしい。」と求めました。

◆声を聴くということ

それぞれの想いを語り合った後、実施を予定しているアンケート調査についての意見交換を行いました。

「障害のある人が何を望んでいるのかを知り、新しい学びのあり方を作っていく必要がある。」「事業所を対象とした調査はあるが、当事者本人への調査は

少ないので貴重な調査。」といった期待が寄せられた一方で、「重度の人に回答してもらうには、『聴きとれる人』が必要になる。」「同じ回答でも『諦めて』選択している場合もある。本音を引き出せるような『聴き方』があると良い。」など、障害者を対象とする調査の難しさを指摘する声もありました。

質問内容については、「勝手な決めつけにならないよう、選択肢を多くした方が良い。」「そもそも（学習）ニーズがあるのかどうかすら分かっていないのが現実。阻害要因が何かを見つけられたら良い。」「テレワークを立ち上げた頃、身体障害者に利用ニーズがあると思っていたが、近年多いのは発達障害や精神障害の人たちの利用希望。いろいろなことが気になり他人と一緒に仕事がしにくい人のニーズと合致した。こちらが想定していないところにニーズがあったりする。」といった意見が出されました。

さらに、調査協力依頼では、「以前自分たちが手掛けた調査では、病院や学校で生まれる『お母さんのネットワーク』が力を発揮した。」「特別支援学校は、卒業後3年間アンケートを送付している。時期が合えば同封も可能ではないか。」など、委員それぞれの立場から協力が可能なことを申し出る雰囲気を作られていきました。

◆調査をする意味とは

「調査することが目的なのではなく、調査結果をどう生かすかが大事。」「『要望』に応えようと思ったときのために記名してもらってもいいのでは？」など、調査結果を生かした事業の展開を求める声もあります。「共に学ぶ、ということについて、障害のある人はどういう関わりをして欲しいのか、他の人たちはどういう関わりをしたいと思っているのか、本当は両方の立場から聞いてみたい。」という発言は、「共生社会づくり」に向けた問題提起として次に取り組むべき課題も提示されました。

◆共に学ぶということ

本事業の事務局を担う愛媛大学教職大学院特定教授・遠藤委員から「昨年度、松山市社会福祉協議会と市内の三つの小学校で福祉教育の実践研究を行った。まずは関わることから始めて、その人ともっと仲良くなりたいからそのために子どもたちが学んでいく。それと同じようなことかもしれない。」という具体的な実践例が語られました。

本事業の申請にあたって、全国の先進事例などの資料を提供してくれたり、関係部署を紹介してくれたりした愛媛県スポーツ・文化部文化局まなび推進課社会教育主事・土手委員からは、遠藤委員の発言を受けた形で「まずは関わること。関わることで学ぶ、それが『共に学ぶコミュニティ』づくりなのではないかと感じている。この取り組みが県に広がっていくことを願っている。」と、事業の方向性が示されました。

熟議することによって、互いの立場や疑問に感じていること、大事にしたいことなどを理解し合うことができました。何を指すのかという目的を確かめることが、連携協議会の「協働」の第一歩でした。

2. 「違い」が生み出す「豊かさ」

初回の会議では、この事業を通して「おでん型」(愛媛大学名誉教授・讃岐委員が提唱。いろいろな具材が合わされることで旨味を出し合い、味わいを深める、の意味。)の共生社会を目指していくことを確認しました。その実現に向けて、今の社会がどの段階にあるのか、障害者自身がどう感じ、どうしていきたいと考えているのかを確かめながら、本年度はもちろん、事業終了後も息長く取り組んでいく意志を確認しました。

目的を共有し、異なるそれぞれの立場から主体的に事業に関わっていく意識が高まり、「協働」に一步踏み出しました。

以下、主な事業を進めていく際に、連携協議会が力を発揮した内容を述べながら、今後の事業推進で期待される協働のあり方を展望したいと思います。

◆ワーキンググループ結成

まず、障害者が主体となって学びの場を企画するにあたり、初年度でもある今年は「積極的に新しいことに挑戦したり、周囲に広めたりすることができる」人材にワーキンググループメンバーとして参加してもらいました。適した人材の情報は、当事者団体や就労系事業所を運営する委員が詳しく、人間関係が構築されているため、依頼・交渉もスムーズに行うことができました。

◆アンケート調査

次に、ニーズ調査において、「質問票作成」段階では特別支援教育分野と学識者の専門的な知見から、表記方法や用語、選択肢の並び方などが慎重に検討されました。

「回答依頼」段階では当事者団体、家族会、そして障がい者就業・生活支援センターのネットワークが大活躍しました。通常、障害者自身が回答者になる調査というものは少なく、まずこの調査の趣旨を理解してもらう必要があります。身近で信頼関係がある人たちからすすめられたり説明されたりすることで

多くの方が調査に協力してくれました。

また、就業・生活支援センターは相談支援専門員の広いネットワークを有しており、相談支援専門員が担当する利用者（障害者）一人一人に調査票を手渡し、必要があれば説明を加えたり、回答記入の支援を行ったりしてくれました。個々の障害内容・程度や生活状況・就労状況などを把握している専門職の影響力の大きさを目の当たりにしました。

◆プログラムの実施と広報活動

本事業では、障害の有無をこえて構成するワーキンググループが主体となって学習プログラムを開発することとしていたため、連携協議会が直接プログラムの内容に意見する場面はなく、各地域で実施される事業の会場利用や告知などに関して情報提供や紹介などを担いました。民間団体によるまったく新しい事業であるにも関わらず、公立の美術館から大きな協力が得られたり、障害者団体や施設、地域の公民館とのつながりが得られたりしたのは、連携協議会の後ろ盾によるものと思います。

また、事業を広く一般に告知する機会は、ほとんどの教育イベント・福祉イベントが中止になった中、愛媛県主催の「生涯学習夢まつり」と愛媛大学が主催するコンファレンス「〇（まる）のつどい」において確保することができました。

「生涯学習夢まつり」は連携協議会委員（愛媛県職員）が担当者だったため、ポスター展示を行うコーナーを設けてもらうことができました。イベント自体が大幅に縮小されたため来場者も少なかったのですが、中予エリアの俳句作りプログラムを中心に報告を行いました。

「〇（まる）のつどい」では、愛媛大学が設置する連携協議会に兼任する委員が橋渡し役となり、第3分科会を担当させてもらうことができました。共生社会に向けた学習活動を展開している実践家たちのインタビュー動画を制作し、

多彩な「共に学ぶ」活動を紹介しました。分科会の出演者は、それぞれの分野で活躍されている方々でもあるため、障害者にこれまで関わったことのない人たちにも本事業の取り組みに関心を持ってもらうきっかけとなりました。

ポスターと動画のカット写真は、巻末に掲載しています。

動画配信再開も検討されていますのでお楽しみお待ちください。

【○（まる）のつどい第3分科会出演者のみなさん】



(yummydance さん)



(中村和憲さん)



(佐々木美香さん)



(森畑裕子さん)

以上のことから考えると、障害者の生涯学習を振興する連携協議会にはまず「障害者当事者」及び「家族」のネットワークを有する者の参加が不可欠です。

その信頼関係に基づく情報の周知が効果的であり、一人ひとりの行動に大きな影響を与えるからです。また、「就業・生活支援センター」が持つ相談支援専門員のネットワークも同じく重要な役割を果たします。

学習環境・条件の整備という意味では、行政関係部署の参加も有効かもしれませんが、本事業だけで行政の縦割りを崩すことは難しく、行政職員が積極的・主体的に参画するためには、担当課をこえて協働することを容易にする庁内の土壌づくりが必要です。

また、事業説明で訪問した福祉施設において、社会福祉士資格を持つ職員から「自分たちは障がい者の地域生活の充実につながる社会資源を探しているので、この事業が『社会資源になる』ことを期待する。」「さまざまな事業所に所属しているので、情報を広げやすい。」との提案・紹介がありました。社会福祉士会への協働依頼も検討する必要があるかもしれません。

なお、アンケート調査の結果では、図書館は比較的足を運んでいることが分かり、県教委特別支援教育課・原委員は「学生時代に行ったことがあるためではないか」と推察していました。学校の校外活動などで地域の社会教育施設などを利用することで、学生のうちからなじみのある場所になっていれば、卒業後の生涯学習の場としての利用につながるかもしれません。

また、当法人の仙波事務局長から、既存の社会教育施設のハード面での整備の不十分さが指摘され、鹿島委員からは地域の中に「安心して気楽に立ち寄れる場所はどれだけあるのだろうか」との問いかけがありました。

施設を運営する側や一緒に利用することになる市民たちの「共生」意識を高める必要も示唆されました。連携協議会には、共生社会作りに向けた社会教育の積極的な取り組みを牽引する役割が求められるのではないのでしょうか。

本事業で障害者が主体的に活動を展開している姿にふれ、川崎委員は「パラスポーツ選手が、『心のバリアフリー』ステッカーを飲食店に広めていく活動に取り組んでいる。反響も大きく、やはり、障害者が自ら主体的に動いていくことが必要。」と、意義を再確認していました。事務局・長島委員も、自身の体験から「福祉の現場でも、障害者が主体的に行動することを大切にする支援が必要」と提起し、障がい福祉課・武市委員は「担当している障がい者芸術文化祭でも、そのような場面を作っていきたい。」と発言していました。

障害者主体の共生社会作りの視点や「共に過ごす」「共に学ぶ」場面作りを、連携協議会委員がそれぞれの立場で一つ一つ実行していくなら、それはゆるやかで確かな協働です。これからも「違う」ことが強みとなる連携協議会でありたいと思います。



おわりに



この事業を進めるのにあたって、コーディネーターは文部科学省の啓発資料



(左)を持参し、県内の福祉施設や事業所、当事者会や家族会、社会教育関係者に事業説明をしてまわりました。

ともすれば「障害者のことは医療や障害者福祉、特別支援教育に」という意識を持つてしまう社会教育関係者に、そして、就労以外の社会参加方法に親しみが無い福祉関係者や障害者本人に、「共に学ぶ」ことで実現していく「共生社会」づくりの担い手になる意識を持ってもらいたいと

考えたからです。

このリーフレットをはじめて見た方々は、総じて「文科はそんなことをはじめたんですか」と驚いていましたが、障害者・福祉関係者は歓迎と意欲を示し、社会教育関係者はハード面での難しさを口にしながらも、柔軟な発想で挑戦していく姿勢を見せていました。それは、新型コロナウイルス感染症によって「関わること」「つながること」「ふれあうこと」が失われる危機感と、つながりを再構築しようとする意志のあらわれだったようにも思います。

「共に学ぶ」といういとなみは、わたしたちにたくさんの気づきを与えてくれます。「共に学ぶ」という目標を達成するためには、一緒に取り組む「他者」を理解していかなければなりません。

障がい福祉事業所で勤務しているワーキンググループメンバーは、それまでの「理解」は、ごく限られた場面での支援に必要な一部分の理解でしかなかっ

たと気づいたそうです。たとえば、学習プログラム作りのための情報を調べていた時、視覚障害者が操作するスマホから聞こえてきた声（読み上げ機能）はHPに掲載されている写真を「写真」としか読み上げないことに気づきました。驚いて尋ねると、「➡（進むことを示す矢印）」も「アイコン」としか読み上げられないと教えてもらい、「スマホの読み上げ機能があるから大丈夫だろう」という自分の思い込みにショックを受けていました。視覚障害者自身も「生活の中で感じるそういう小さな困難をわざわざ誰かに説明することはないから」と、これまで改善を求める声を上げていなかったことに気づきました。

また、本事業担当者自身も、計画していた手帳タイプの「生涯学習サポート」作成について、障害者からも支援職からも「自分で記入することが難しい人は多い」「なくさないように管理するのが大変になる」との声をたくさん頂戴し、想像だけで計画していたことを反省しました。その後、一緒に過ごすうちに多くの方が携帯電話やスマホを利用して、外出先などで頻繁に写真を撮る姿にふれ、現在は、スマホの写真と簡単なメモで学習活動を管理する方法を検討しています。アルバム機能やメモアプリなどでポートフォリオを作成し、後日、その記録物をコーディネーターや学習仲間、家族、支援者らと対話しながら整理していくことで、自分の関心分野に気づくことができるかもしれません。そこから、次の目標ができるかもしれませんし、他者と共有することで、仲間が得られたり、一つ一つの取り組みに張り合い生まれたりするかもしれません。

今、当法人のHPでは、本事業専用ページでインクルーシブ・デザインを実験しています。デザイン性、視覚情報、文字情報が調和するホームページのあり方を見出すべく、専門家と協議を重ねています。

共に過ごすことで気づいたことを伝え、行動していくことで、共生社会は近づいてくるはずです。

連携協議会の総括会議で、愛媛大学名誉教授・讃岐委員は「これまで、専門化した方がより良いサービスが提供できると考えられてやってきた。良かれと思って、専門的に、高度に、と。他の人は、『障害者には専門の場所の方が良いんじゃないか』と求めてきたはず。」とふりかえり、「でもそれでは分断が深まってしまうとようやく気付いた。これからは『おでん型』でいこう。」と、わたしたちが築いてきたこれまでの社会と、これから築いていく社会を包み込むような言葉でしめくりました。

本事業では「障害者の生涯学習を実現するための制度横断的な支援システム」として障害者を取り巻く行政部署や機関の横串を通すまでには至りませんでした。が、「共に学ぶコミュニティ」の取り組みに接して、その意義を理解し、支援しようとする「人のつながり」は確実に構築されました。

えひめ子どもチャレンジ支援機構は、「かかわりをチカラに・つながりをカタチに」を合言葉に、地域の実践家たちがつながり、知恵と勇気を分かち合い、力を高めていく場を作り続けています。この集まりは、本事業によって、いっそう彩りを豊かにすることでしょう。そして、まだ見たことのない、でも、誰もが求めていたような味わい深さを持った「おでん」をより多くの人に届けていくために小さく強い「共に学ぶコミュニティ」を築いていきたいと思います。



貴重な機会を賜りましたことに、心から感謝申し上げますとともに、本事業に関わってくださったすべてのみなさまに心からお礼申し上げます。

「共に学ぶコミュニティ」形成実践研究事業担当

柴崎あい



学びと共生社会に関するアンケート調査

質問は20問あります。

質問に対してあてはまる回答の番号を○で囲むか、番号の隣に●(黒丸)などの印をつけてください。あてはまるものがない場合は回答をせずに次の間に進んでください。

答えにくい質問には答えなくても構いません。

ご協力をよろしくお願い申し上げます。

問1. あなたの年齢を()の中に数字で記入してください。

()歳

問2. あなたがお住まいの市町を一つ選んでください。選択肢は21個あります。

- 1 四国中央市
- 2 新居浜市
- 3 西条市
- 4 今治市
- 5 上島町
- 6 松山市
- 7 東温市
- 8 砥部町
- 9 久万高原町
- 10 松前町
- 11 伊予市

- 12 内子町
- 13 大洲市
- 14 西予市
- 15 八幡浜市
- 16 鬼北町
- 17 松野町
- 18 伊方町
- 19 宇和島市
- 20 愛南町
- 21 その他()

問3. ご回答を「記入している」方について、あてはまるものを一つ選んでください。選択肢は7個あります。

- 1 本人が回答している
- 2 本人が誰かに読み上げや入力の補助・代理をもらい回答している
- 3 家族が当事者の状況について回答している
- 4 施設職員が特定の入所者の状況について回答している
- 5 事業所職員が特定の通所者の状況について回答している
- 6 相談支援専門員が特定の利用者の状況について回答している
- 7 その他(具体的に:)

問4. あなたの障害の種類や状況を誰かに説明する際に伝えている内容について、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は11個あります。

- 1 身体障害 (視覚)
- 2 身体障害 (聴覚)
- 3 身体障害 (肢体不自由・車いすやストレッチャーを使用している)
- 4 身体障害 (肢体不自由・車いすやストレッチャーは使用していない)
- 5 知的障害
- 6 精神障害
- 7 発達障害
- 8 音声・言語・咀嚼機能障害
- 9 内部障害
- 10 難病
- 11 その他 (具体的に：)

問5. 障害者手帳の取得について、あてはまるものを一つ選んでください。選択肢は3個あります。

- 1 持っている
- 2 持っていない
- 3 申請中

問6. 利用している障害福祉サービスについて、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は14個あります。

- 1 居宅介護 (ホームヘルプ)
- 2 重度訪問介護
- 3 同行支援
- 4 療養介護

- 5 生活介護
- 6 施設入所
- 7 共同生活援助 (グループホーム)
- 8 自立訓練 (機能訓練)
- 9 自立訓練 (生活訓練)
- 10 就労移行支援
- 11 就労継続支援 (A型)
- 12 就労継続支援 (B型)
- 13 その他 (具体的に：)
- 14 利用していない

問7. 主な日中の過ごし方について、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は12個あります。

- 1 家庭や施設などの住居で療養している
- 2 家庭で家事や育児・介護を行っている
- 3 社会活動 (ボランティアなど) に参加している
- 4 職業訓練校に通っている
- 5 大学や専門学校に通っている
- 6 生活介護事業に通っている
- 7 就労継続支援 (B型) 事業所で働いている
- 8 就労継続支援 (A型) 事業所で働いている
- 9 6～8以外の福祉サービス事業に通っている (具体的に：)
- 10 企業などの経営者として働いている
- 11 企業・役所などで働いている (アルバイトを含む)

12 その他 (具体的に:)

問8. 日頃よく使っている情報メディアについて、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は10個あります。

- 1 テレビ
- 2 ラジオ
- 3 新聞
- 4 雑誌、書籍
- 5 パソコン
- 6 タブレット
- 7 スマートフォン
- 8 スマートフォン以外の携帯電話
- 9 ゲーム機の通信機能
- 10 その他 (具体的に:)

問9. 新しい情報を得たり何かを調べたりするときによく利用するものをすべて選んでください。選択肢は11個あります。

- 1 テレビやラジオ
- 2 新聞
- 3 市町の広報誌
- 4 雑誌、書籍
- 5 通所先の事業所などからの案内
- 6 家族からの情報
- 7 友人からの情報
- 8 相談支援専門員からの情報

- 9 病院やスーパーマーケットなどに掲示されているポスターやチラシ
- 10 パソコンやタブレット、スマートフォンによるインターネットの情報
- 11 その他 (具体的に:)

問10. 利用しているSNSについて、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は5個あります。

- 1 LINE
- 2 Facebook
- 3 Twitter
- 4 Instagram
- 5 その他 (具体的に:)

問11. この1年間で、勉強会やセミナーに参加したり、本を調べたり、観賞したり、イベントに参加したりしたことがある内容について、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は32個あります。

- 1 算数・数学
- 2 文学
- 3 歴史
- 4 自然
- 5 時事問題・社会問題
- 6 外国語
- 7 レクリエーション
- 8 美術

- 9 音楽 オンガク
- 10 演劇 エンゲキ
- 11 書道 シュドウ
- 12 茶道・華道 チャウド・カウド
- 13 写真 シヤシヤン
- 14 手芸 テウゲイ
- 15 料理 リョウリ
- 16 フアツション フアツション
- 17 防災 ハイサイ
- 18 スポーツ スポーツ
- 19 法律や制度 ホウリツやセイド
- 20 資格の取得 シヤクシヤク
- 21 健康の維持・向上 ケンコウのイジキ
- 22 ストレスコントロール ストレスコントロール
- 23 自分が使いたい新しい福祉用具や支援機器 自分が使いたい新しい福祉用具や支援機器
- 24 自分が使いたい手話や点字 自分が使いたい手話や点字
- 25 コミュニケーション能力の向上に関すること コミュニケーション能力の向上に関すること
- 26 家事の自立（洗濯や掃除など）に関すること 家事の自立（洗濯や掃除など）に関すること
- 27 社会生活に必要なルールやマナー 社会生活に必要なルールやマナー
- 28 パソコンやスマートフォン等の初歩的な操作に関すること パソコンやスマートフォン等の初歩的な操作に関すること
- 29 パソコンやインターネットの高度な活用に関すること パソコンやインターネットの高度な活用に関すること
- 30 支援するための技術（要約筆記やガイドヘルプ、介護） 支援するための技術（要約筆記やガイドヘルプ、介護）
- 31 ボランティア活動 ボランティア活動
- 32 その他（具体的に：)

問12. これから学んだり参加したりしたいと思う内容について、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は32個あります。

- 1 算数・数学 サンズウ・スウガク
- 2 文学 ブンガク
- 3 歴史 レキシ
- 4 自然 シゼン
- 5 時事問題・社会問題 ジジムンダイ
- 6 外国語 ガイコクゴ
- 7 レクリエーション レクリエーション
- 8 美術 ビジュツ
- 9 音楽 オンガク
- 10 演劇 エンゲキ
- 11 書道 シュドウ
- 12 茶道・華道 チャウド
- 13 写真 シヤシヤン
- 14 手芸 テウゲイ
- 15 料理 リョウリ
- 16 フアツション フアツション
- 17 防災 ハイサイ
- 18 スポーツ スポーツ
- 19 法律や制度 ホウリツやセイド
- 20 資格の取得 シヤクシヤク
- 21 健康の維持・向上 ケンコウのイジキ
- 22 ストレスコントロール ストレスコントロール
- 23 自分が使いたい新しい福祉用具や支援機器 自分が使いたい新しい福祉用具や支援機器

- 24 自分が使いたい手話や点字
 25 コミュニケーション能力の向上に関すること
 26 家事の自立（洗濯や掃除など）に関すること
 27 社会生活に必要なルールやマナー
 28 パソコンやスマートフォンなどの初歩的な操作に関すること
 29 パソコンやインターネットの高度な活用に関すること
 30 支援するための技術（要約筆記やガイドヘルプ、介護）
 31 ホラントエイブ活動
 32 その他（具体的に： _____)

問13. 「問12」でも一つでも○をつけた方は、その理由としてあてはまるものをすべて選んでください。選択肢は7個あります。「問12」で○をつけた方は回答しなくてかまいません。

- 1 自分の暮らしを豊かにしたいから
- 2 生活の自立をはかりたいから
- 3 経済活動を充実・向上させたいから
- 4 新しい資格を取得したいから
- 5 人間関係を広げたいから
- 6 社会に貢献したいから
- 7 その他（具体的に： _____)

問14. 学習活動や体験活動への参加について、あてはまるものを選んでください。選択肢は10個あります。

- 1 身近にどのような学習の場があるのかわからない
- 2 自分が楽しく安心して学ぶことができる場が少ない

- 3 仕事や日常生活で困っておらず、学習する必要がない
- 4 忙しくて学習する時間がない
- 5 学習の場に参加する（外出する）のが大変
- 6 学習することについて相談できる人がいない
- 7 新しいことを始めるのが苦手
- 8 知っている人がいないと新しい場に入りにくい
- 9 新しい人間関係を築くことに負担を感じる
- 10 その他（具体的に： _____)

問15. 学ぶ場や方法について、あてはまるものすべてを選んでください。選択肢は10個あります。

- 1 自宅や入所している施設で、テレビを視聴したり書籍を読んだりして一人で学習したい
- 2 自宅や入所している施設で、講師などの指導を受けて学習したい
- 3 自宅や入所している施設で、インターネットを通じた双方向のやりとりによって学習したい
- 4 職場や通所している事業所で、講師などの指導を受けて学習したい
- 5 同窓会による集まりの場で、講師などの指導を受けて学習したい
- 6 趣味や関心と同じ仲間が集まり、自分たちで教え合うなどして学習したい
- 7 図書館や公民館で、書籍などを読んで一人で学習したい
- 8 図書館や公民館などの公的機関が主催する講座に参加して学習したい
- 9 カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室に参加して学習したい

10 その他 (具体的に：)

問16. 今の自分の人間関係について、もっともよくあてはまるものを一つ選んでください。選択肢は3個あります。

- 1 満足しており、特に人間関係を広げたいと思わない
- 2 もっと人間関係を広げたい
- 3 どちらともいえない

問17. よく足を運ぶ場所・気に入っている場所があれば、あてはまるものをすべて選んでください。選択肢は14個あります。

- 1 出身の学校
- 2 地域の大学などの開放事業
- 3 公民館
- 4 生涯学習センター
- 5 コミュニティセンター
- 6 青少年センター
- 7 市民会館や県民文化会館
- 8 図書館
- 9 美術館
- 10 民間の展示ホール
- 11 博物館
- 12 民間の劇場
- 13 体育館・運動場
- 14 地域のテートイベント

問18. 障害の有無をこえて関わり合う人間関係づくりや社会づくりについて、あなたの考えにもっともよくあてはまるものを一つ選んでください。選択肢は4個あります。

- 1 もっと積極的に関わっていききたい
- 2 現状ぐらいの関わりを持っていききたい
- 3 あまり関わりたいと思わない
- 4 どちらともいえない

問19. 障害の有無をこえて関わり合う人間関係づくりや社会づくりについて、あなたの考えを下の枠の中に自由に記述してください。

お問い合わせ先
問20. 本調査の集計結果の報告や本事業で実施する学習プログラム
についての案内をご希望される方は、お名前とご連絡先を下の枠の中に
ご記入ください。報告や案内が必要ない方は記入しないでください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

NPQ法人えひめ子どもチャレンジ支援機構

障害の有無をこえて共に学ぶコミュニティづくりを目指し
愛媛県内でさまざまな事業を展開しています

文部科学省



「令和2年度 障害者の多様な学習活動を
総合的に支援するための実践研究」

NPO法人えひめ子どもチャレンジ支援機構

「共に学ぶコミュニティ形成実践研究事業」

【学習プログラムの開発】

県内各地で、多様な人たちが共に学ぶことができるプログラムづくりに挑戦しています。

中予エリアでは、俳句専門雑誌の発行や各種俳句イベントの企画・運営、県内の学校等での俳句教室を多く手掛けてきた「マルコボ・コム」さんのアドバイスを受けながら俳句を詠み、自分だけの表現や伝え合う楽しさを味わっています。

このほか、郷土の味を伝える動画レシピづくり、安心して触れることができるアート作品展など、“いっしょに楽しむためには？”を提案し合いながらプログラムづくりに取り組んでいます。

【「学びと共生社会づくり」に関するアンケート調査】

「あなたはどんな日常生活を送っていますか？」「どんなことに興味がありますか？」「新しいことを始めるのは大変ですか？」…“学び”というキーワードから、これからの「共に生きる社会」を展望するために、愛媛県内の障害者及び関係者のみなさんの「声」を集めています。

Google Form でも回答を受け付けています。ぜひご参加ください！ ➡



【連携協議会】

障がい者福祉、特別支援教育、社会教育、生涯学習、就労、、、幅広い行政部署や事業所関係者、障害者当事者、家族会、研究者などで構成された連携協議会が発足しました。

委員一人ひとりが「わがごと」で考え、率直な意見を述べ合い、出し惜しみなく力を発揮しようとする関わり方によって、これからのインクルーシブな社会のあり方を見出そうとしています。

“誰一人取り残さない”ための本気、本当の「協働」がここにはあります。

さあ、
いっしょに楽しもう

コロナ禍により中止となった松山まつり。
有志が呼びかけた「松山・野球拳オンライン」
にみんなでエントリー！

「ダンスなんてムリ！」と後ずさりしたメンバ
ーも、音を聴き、仲間の動きを見て、、、まなざし
ひとつも微笑みひとつも「ダンス」になることに
気づいた、記念すべき「はじめの一歩」。

インクルーシブな野球拳おどりを観たら
きっとあなたも踊りたくなる！？

Youtube、ぜひご覧ください！➡



「愛媛県民ですから、もちろん俳句は詠めま
すよ」って言いたい！

「この句にはこんな風景を感じる」「この言葉
にはこんな気持ちを込めた」と語り合いなが
ら、互いを知り合っていく時間の心地よさ。

日常の景色を見る目も変わっていきます。

小さくきらめく 17 文字、すべてを包み込む
「インクルーシブ・セブンティーン」。

メンバー
募集中！

お問い合わせは ➡ E-mail : ko.tomonimanabu@gmail.com (担当：柴崎)

NPO法人 えひめ子どもチャレンジ支援機構

「共生社会づくり」というと
かたくなるしい

「誰かがつくるんだろう」と
人任せな感じになる

だから僕たちは

「いっしょに楽しみながら学ぶ」を
試してみることにした

始めてみると

不思議なぐらい自然体で

「こんなことが難しい」と
肩の力を抜いて説明できた

「これって困る？」と

気兼ねなく尋ねることができた

見つめ合いすぎないのが、いい
僕たちが見ているのは

「楽しく学ぶ」という目標

同じものを目指し、隣にいる

一緒に歩いていく仲間だから
遠慮しないでいいんだ

10 年後には

「インクルーシブ」なんて
言う必要もなくなっている

「共生社会づくり」という言葉を
懐かしく思い出す日がやって来る

想像力があれば

違いは壁にならない

学ぼう

楽しもう

想像力も僕たちも

無限だ

中村和憲さん



(協力：おはなし屋えっちゃんの「おはなし CAFE」)

佐々木美香さん



(協力：株式会社チルドレンズポート)

森畑裕子さん



(協力：松山市社会福祉協議会・生きがい交流センターしみず)